

大松様遺跡

1994年1月

島根町教育委員会

序

本町には、周知の遺跡は20ヶ所あり、遺跡の数としては、八束郡内では比較的少ない町であり、遺跡の新たな発見もありませんでしたが、平成4年度から着工された町道・多古沖泊線の改良工事区域内を分布調査した結果、山の形状や周囲の玉砂利の散布状況から、古墳の可能性が高いとの結論に達し、今回、調査を始めました。しかし、発掘が進むにつれても、古墳らしきものは発見されず、出土品と多くの遺構のみが検出されました。

その結果、江戸時代頃の、この地の様子を探るに必要な参考資料を多く得ることができました。あくまでも、住民の生命・安全を第一とする立場から、この遺跡は、やむなく記録保存に留めることになりましたが、この成果が、今後の本町の文化財の保護と活用に資することを期待したいものであります。

終わりに、本調査に対し格別のご支援とご協力をいただいた島根県教育委員会文化課並びに、直接調査を担当していただいた石井悠氏、その他関係各位に対し深甚な謝意を表する次第でございます。

平成6年1月

島根町教育委員会

教育長 金 村 庄 吉

例　　言

1. 本書は、町道多古沖泊線道路改良工事に伴い、島根町教育委員会が実施した大
松様遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査の組織は次のとおりである。

調査主体　　島根町教育委員会

事務局　　〃　　教育長　　金村庄吉

　　〃　　教育次長　　湯原章

調査担当　　鹿島町立鹿島中学校教諭　　石井悠

調査指導　　島根町立野波小学校教頭　　横山純夫

　　島根県教育委員会文化課文化財保護主事　　足立克巳

3. 発掘調査に関して物心両面から(有)余村組、島根町中央公民館長伊達章氏、同主任角田正子氏、(株)共立エンジニヤの多人な援助を得た。

4. 発掘作業にあたり川岡清治、塩田松之助、朝田恒子、山口和子、平石二三枝、余村静子各氏の協力を得た。また、野波中学校生徒の川上達也君の献身的な調査補助を得ることもできた。

5. 遺物の整理・実測、各種図面の整理等は石井が行った。

6. 遺構および遺物実測図の作成は田中恵氏の手によるが、一部は横山、石井が行った。

7. 本書の執筆は横山、石井、湯原があたり、編集は石井が行った。

8. 表紙の題字は島根町教育委員会教育長金村庄吉による。

目 次

I 遺跡のあらまし	1
調査に至る経緯	1
遺跡の位置	1
島根町内の主な遺跡	2
II 調査のあらまし	4
遺跡の調査	4
発掘前の状況	5
山守勝助の石碑	8
検出遺構	9
古墳	9
玉砂利	11
山石	11
テラス状遺構	13
土壙	14
集石遺構	16
溝 1	17
溝 2	17
溝 3	18
溝 4	18
道路 1	18
溝 5	22
道路 2	22
出土遺物	24
染付	24
古銭	25
土錘	26
山守勝助について	27
まとめ	28

挿図目次

挿図 1 遠景（多古湾から）	1	挿図 30 SK 01 完掘後	15
2 島根町内の遺跡	3	31 SX 02	16
3 地形測量・調査区設定	4	32 SX 02	16
4 荒掘り作業	4	33 SX 02 実測図	16
5 遺構精査	4	34 SD 01, SD 02	17
6 遺構実測	4	35 SD01とSD02・SD05の切り合	17
7 遺跡周辺の地形図	5	36 SD01, SD02, 実測図	17
8 大松様遺跡地形実測図	6	37 SD03, SD04, SS01 実測図	19
9 発掘前（西側から）	7	38 SD03, SD04, SX02	20
10 発掘前（南側から）	7	39 SD03, SD04 の上層堆積状況	20
11 山守勝助の石碑	8	40 たまつた雨水（I 区のSD03）	20
12 山守勝助の石碑台石	8	41 SD03・SD04の切り合	20
13 山守勝助の石碑実測図	8	42 SD03・SS01（手前）	20
14 頂部東西壁の断面	9	43 SD03, SD04, SS01（西から）	21
15 東西・南北壁断面実測図	10	44 SD03, SD04, SS01	21
16 山石検出状況実測図	11	45 SD05, SS02 実測図	22
17 玉砂利検出状況	12	46 SD05, SS02	23
18 玉砂利検出状況（IV 区から）	12	47 発掘後の全景（西から）	23
19 山石検出状況（I・II 区）	12	48 染付実測図	24
20 山石検出状況（I 区）	12	49 小德利出土状況	24
21 山石検出状況（II 区）	12	50 湯飲み茶碗出土状況	24
22 SX 01 堆積土層	13	51 染付	25
23 SX 01	13	52 古銭拓本	25
24 SX 01 実測図	13	53 古銭出土状況	25
25 SK 01 実測図	14	54 古銭	25
26 SK 01	15	55 土錘実測図	26
27 SK 01 掘形	15	56 土錘	26
28 SK 01	15	57 権現山遺跡遠景	28
29 SK 01	15	58 大松様遺跡検出遺構実測図	29

おおまつあん

大松様遺跡発掘調査報告

I 遺跡のあらまし

調査に至る経緯

平成4年度から町道・多古沖泊線改良工事が始り、この工事区内に「山守勝助」の石碑があり、この石碑のある丘陵が古墳ではないかと、地元小学校の日本考古学協会会員の先生から指摘を受けた。これにより、島根県教育委員会文化課へ分布調査を依頼した結果、古墳の可能性が高いとの結論から調査員を他機関から派遣いただき、調査を実施するに至った。

遺跡の位置

本遺跡は、島根県八束郡島根町多古1908の3他に存在する。日本海に面した海岸に位置する多古集落の後背地にあたり、丘陵中腹を通る町道多古沖泊線沿いに存在する。多古集落は北西方向に開けた小さな湾に面する小さな集落で、平地はほとんどなく丘陵寄りの斜面に民家が密集している。この湾は、冬の荒れ狂う北西季節風を直接受けるが、穏やかな日和の場合には天然の良港といえよう。後にも述べれるが、本遺跡の存在する地点は、多古集落の人々にとっては小波、沖泊方面への別れ道がある交通の要衝であった。

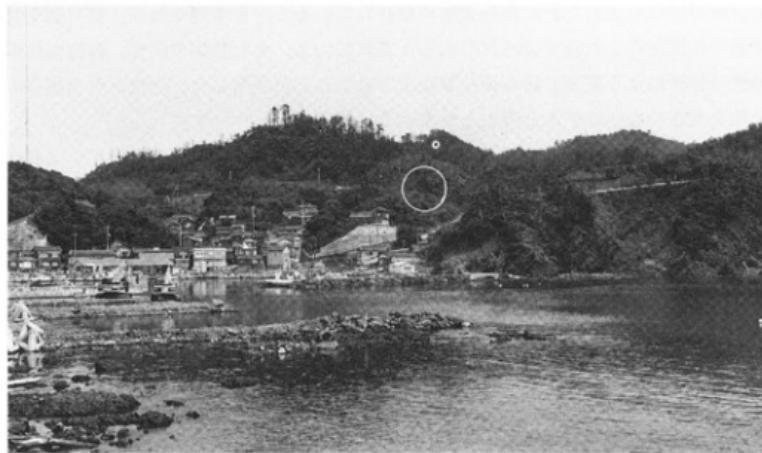


図1 遠景（多古湾から）

島根町内の主な遺跡

現在までに町内の周知の遺跡は20ヶ所を数える。古墳時代の遺跡が多く、縄文・弥生時代のものは未だ発見されていない。以下、主なものを地区毎に紹介しよう。

野波地区 亀田横穴群(図2-3)は、島根町誌¹⁾によると北支群・南支群あわせて11穴の横穴が存在している。平成3年度の島根町教育委員会による発掘調査²⁾では北第Ⅲ支群の1穴が発掘され、玄室に石床を設けた丸天井タイプの横穴であることが判明した。出土遺物に須恵器の蓋杯、高杯などがあり、山陰の須恵器Ⅲ期とⅣ期³⁾のものである。追葬が行われたのであろう。亀田・塚古墳(図2-4)は、亀田横穴北支群の丘陵の裾にあたりに存在していた。今は消滅して見られない。昭和18年には蓋のなくなった箱式石棺が中にあったという。明ケ谷遺跡(図2-5)は、野波中学校の敷地造成工事中に須恵器が発見された。Ⅳ期のもので、7世紀ごろの遺跡と推定される。小屋谷遺跡(図2-7)は、野波小学校でプール建設中に須恵器、土師器、土製支脚、木片などが出土した。7世紀ごろから奈良・平安時代にいたる時代のものがある。なかでも、8~9世紀の製塙土器の出土が注目をあびた。⁴⁾ 権現山遺跡(図2-8)は、尾根の先端にあって、墳丘のように加工されており径3~5cmの玉砂利が表面にみられることから古墳とも考えられるが、あるいは大松様遺跡の墳丘状高まりと同様なものかもしれない。野波屏風鉢跡(図2-10)は、北山の脊梁に近い部分に存在し、現在の町道里路線沿いにあたる。約0.5haの広い平坦面を有し鉄滓が散乱している。発掘されていないので詳細は不明であるが、古代から中世の間に營まれた野だたら遺構が存在しているものと推定される。C¹⁴放射性炭素年代測定によれば平安時代のものとされている。また鉄滓や炉壁、野波海岸の砂鉄の分析により銑押し法に似た製鉄法であることが判明した。近世たらら製鉄の技術と人差のないレベルと考えられている。⁵⁾

加賀地区 牛谷古墳(図2-17)は、丘陵中腹の北側斜面に箱式石棺が南北に2基並行して置かれている。南棺の蓋石は四個の突起をもち、内側の天井面が割りこんであるのが特徴的である。墳丘は方墳と考えられるが不明である。古墳時代中期のものと推定されている。天神山古墳(図2-14)は、平な頂上から少し南側の斜面を下ったあたりに位置している。東西に2基の箱式石棺が置かれている。牛谷古墳と同様に古墳時代中期のものと推定されている。奥垣山古墳(図2-18)は、標高100mばかりの尾根上に存在する。墳丘は盛り土が流失しているため、もとの形は不明であるが円墳と推定される。内部主体は、扁平割石を用いた箱式石棺か疑似石棺式石室とでも呼ぶようなものである。遺物はないが、古墳時代後期のものと推定されている。

大芦地区 宮尾横穴群(図2-21)は、大芦小学校の北西方向の傾斜地に存在する。平成元年と翌2年に島根町教育委員会が発掘調査を実施した。⁶⁾ 第1次調査では横穴20穴(不明5を含む)、第2次調査では17穴の計3穴が発掘された。調査区外のものを入れると50穴以上の大型横穴群となろう。各横穴はいくらかのタイプに分けることができる。第1次調査分(谷の入口に近い方)は山陰の須恵器Ⅲ期を主体とするが、第2次調査分(谷の奥)はⅢ期全の遺物ではなく、Ⅳ期のものだけであることが判明した。出土遺物には、須恵器、金環、銀環、勾玉、切子玉、大刀、刀子、鉄鏃、鉄斧がある。これまでの島根半島部の松江・八束地区で調査された横穴群のうちでは最大の規模を有する。古墳時代後期のものである。檜谷古墳(図2-19)は、尾根上に存在する。箱式石棺と考えられるが、その様相から古墳時代後期のものと推定されている。

- | | |
|------------|-------------|
| 1 大松様遺跡 | 12 加賀城跡 |
| 2 かんじゅら山城跡 | 13 広海寺前遺跡 |
| 3 亀田横穴群 | 14 天神山古墳 |
| 4 亀田・塚古墳 | 15 島根中学校前遺跡 |
| 5 明ヶ谷遺跡 | 16 要害山城跡 |
| 6 みほしの城跡 | 17 牛谷古墳群 |
| 7 小屋谷遺跡 | 18 奥垣山古墳 |
| 8 権現山遺跡 | 19 檜谷古墳 |
| 9 城谷の城跡 | 20 北垣遺跡 |
| 10 野波原床鉢跡 | 21 宮尾横穴群 |
| 11 志賀町古墳 | |

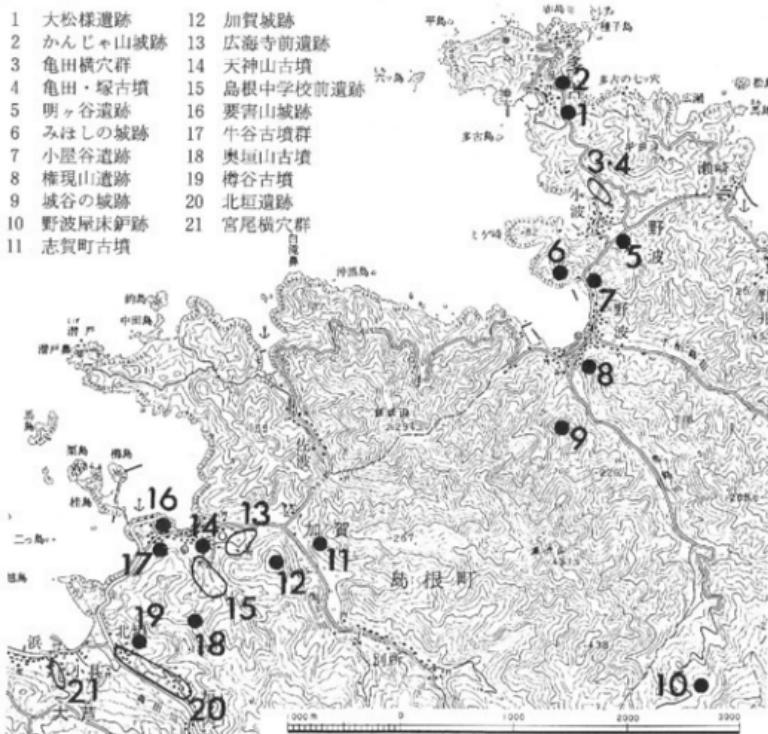


図2 島根町内の遺跡

II 調査のあらまし

遺跡の調査

現地の調査は、平成5年7月21日から開始して8月19日に終了した。調査担当者の勤務の都合により学校の夏休みに実施した。本年の夏は異常気象といわれ、調査期間中雨天が続き、また台風4号が接近するなどの悪天候に悩まされどおしであった。

この遺跡は古墳と考えられていたので、調査区を設定するにあたって、墳丘状の高まり部分を四分し、南東部分から時計まわりにI、II、III、IV区と呼んだ。調査対象地の写真撮影や地形測量(百分の一の地形図……高まり部分は25cmコンタ)を実施して、四分法による全面発掘を行った。なお、事前の地形測量は(株)共立エンジニアに委託して行った。土層観察用のアゼは、各区境の東西方向のものと南北方向のもの2本を利用したが、必要に応じて随所に設けた。検出された遺構等は写真撮影や実測をして、記録にとどめた。



図3 地形測量・調査区設定



図4 荒振り作業



図5 遺構精査



図6 遺構実測

発掘前の状況

遺跡の存在する位置は、前述のように多古集落の後背丘陵の中腹で標高52m前後の所である。町道多古沖泊線敷設のため、地形は変化しており詳細な元の地形や利用状況は不明であるが、地域住民の話によると、旧道沿いに若干の畠が存在していたとのことである。しかし、かなり以前から畠は松林となっていたようである。わずかな緩傾斜地に、高さ約2m、径約8mの墳丘状高まりが存在する。東側および南側に旧道が存在し、現在の町道が敷設されるまで利用されていたという。そのためか、墳丘状高まりは、東側旧道を削って盛土とした後期古墳のような印象を与えた。地表面には、玉砂利の散布がみとめられ、一字一石経を納める経塚の可能性も指摘されていた。また、南側旧道に面した裾部には「山守勝助」の石碑が存在していた。

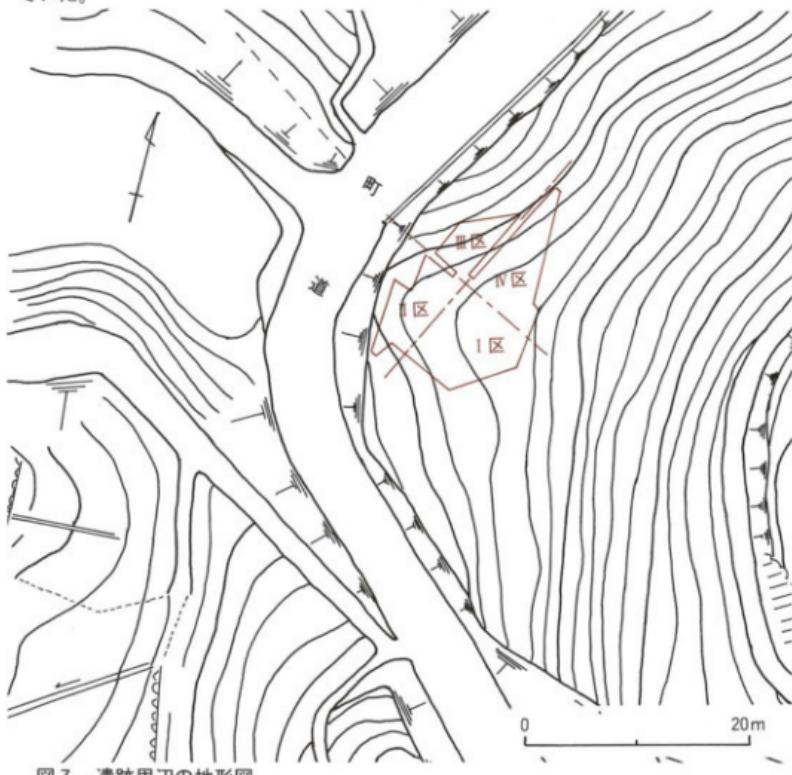


図7 遺跡周辺の地形図

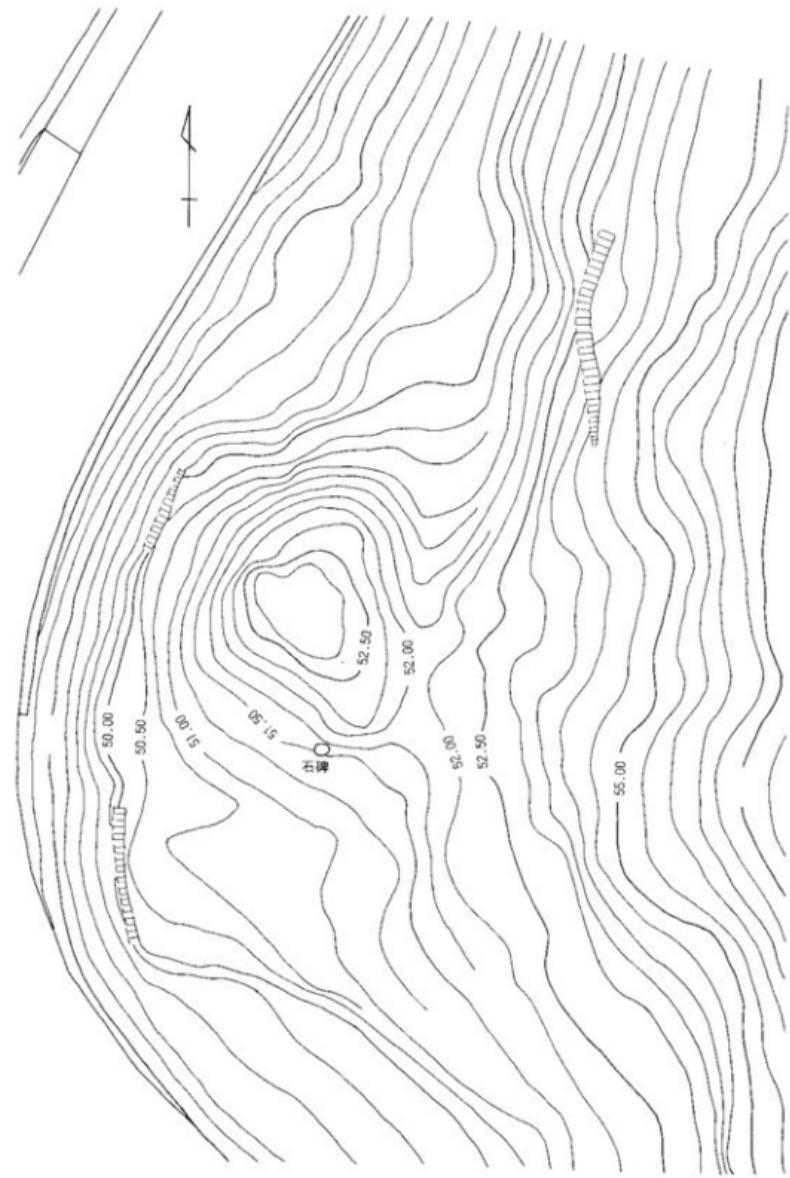


図8 大松様遺跡地形実測図

0 10m



図9 発掘前（西側から）



図10 発掘前（南側から）

山守勝助の石碑 墳丘状高まりの南側裾に存在した。「安政五年四月 山守勝助」と横書体の立派な文字で刻まれている。書風は、中国六朝時代(北魏)の造像記の系譜を引くと推定される。鎌倉時代まではよくみられるが、近世に入るとあまり見られないといわれる。特に地方では珍しい書風といえよう。石碑本体は、地表に現れた部分の高さ約70cm、最大胴径約50cmを測る。胴部横断面が円形に近い自然石を用いている。石碑を移転のため撤去すると、地表下に台石が据えられていた。長さ約80cm、幅約67cm、厚さ約20cmの自然石で、中心には、径40cm、深さ10cmの浅い断面U字形の穴が穿たれていた。この穴に石碑が据えられていた。勝助は当地域の山林事業に功績のあった人物との伝承がある。



図11 山守勝助の石碑



図12 山守勝助の石碑台石



図13 山守勝助の石碑実測図



検出遺構

この地は、遺跡名に表されるように巨大な松が存在していたという。第2次世界大戦中に松根油採取のため、この巨大な松の根を掘ったと伝える向きもあるが、その確実な痕跡を検出することはできなかった。しかし、最近までのかなり大きい松の切株が多数存在しており松根が縦横にはびこっていたため、発掘はかなり困難であった。特に、土層の見分けがつきにくい点も多々あったが、およそ次のような結果を得ることができた。

古 墳 小規模の石室をもつ古墳である可能性も推定されたが、調査の結果次に記す理由から古墳ではないと判断するに至った。

- ① 主体部を検出することができなかった。墳頂部にあたる部分では、土層に若干の変化があり玉砂利を伴う落込みも存在したが、主体部を示す明瞭な変化は認められなかった。
- ② 通常、古墳に伴うと考えられる遺物は全く出土しなかった。
- ③ 玉砂利は後世の遺構に関連するものであることが判明した。
- ④ 墳丘と考えられた部分は、不定形をなし、後世の遺構に関連するもの以外の加工痕は認められなかった。小高い墳丘と考えられた部分を迂回するような形で東側裾と南側裾には旧道が存在し、このあたりで三さ路(小波方面、多古方面、沖泊方面への別れ道)となっていたと伝えられている。こうした外見上の特徴から、分布調査時には古墳と判断されたようである。



図14 頂部東西壁の断面

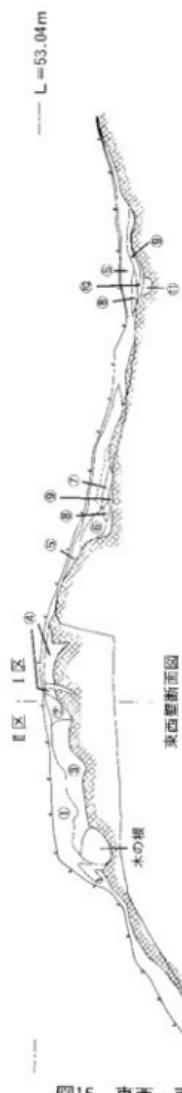
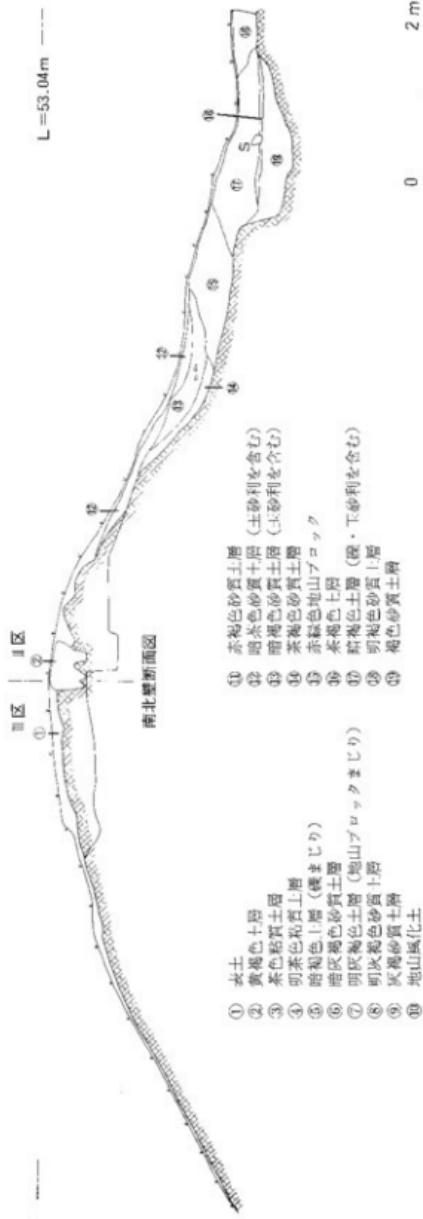


図15 東西・南北壁断面実測図



玉砂利 墳丘状高まりの北側斜面をのぞく部分で玉砂利が検出された。特に、東側斜面では古墳の葺石のごとく検出された。後述のテラス状遺構(SX01)や土壙(SK01)などの遺構部分では、かなりの量の玉砂利が深い位置でもみとめられた。SX01付近の表土近くでは玉砂利に混じって古錢(寛永通寶)が出土している。

山石 必ずしも遺構とはいえないが、SK01上面および墳丘状高まりの南側裾部で山石が検出された。こぶし大から長径40cm位のもので人頭大のものが多い。SK01上面のものは、遺構に伴うと考えられるが、裾部のものは、配置状況に関連性がみられない。後述の集石遺構(SX02)をのぞいて、いずれも地山面からかなり浮いた位置のものを主体としている。



図16 山石検出状況実測図



図17 玉砂利検出状況



図18 玉砂利検出状況（IV区から）



図19 山石検出状況（I・II区）



図20 山石検出状況（I区）



図21 山石検出状況（II区）

テラス状遺構（SX 01） 墳丘と考えられた部分のⅠ・Ⅳ区東側中腹に存在する。地山をL字状に削り取って加工したもので、長さ287cm、床面幅60~110cm、高さ約56cmを測る。南側の床面は北側に比べて幅がせまく、数センチメートル高くなっている。この遺構に堆積した土層は全体に傾斜しており、床面直上には細かい砂が堆積していることから、この遺構は加工された当時およびその後しばらく露出していたものとも思われる。床面直上及び砂層から出土遺物は検出されなかったが、この遺構付近の表土直下の玉砂利層中から古銭（寛永通寶）が出土した。後述の道路に面した位置にあたるので、何かが祀られていた可能性がある。



図22 SX 01 堆積土層



図23 SX 01

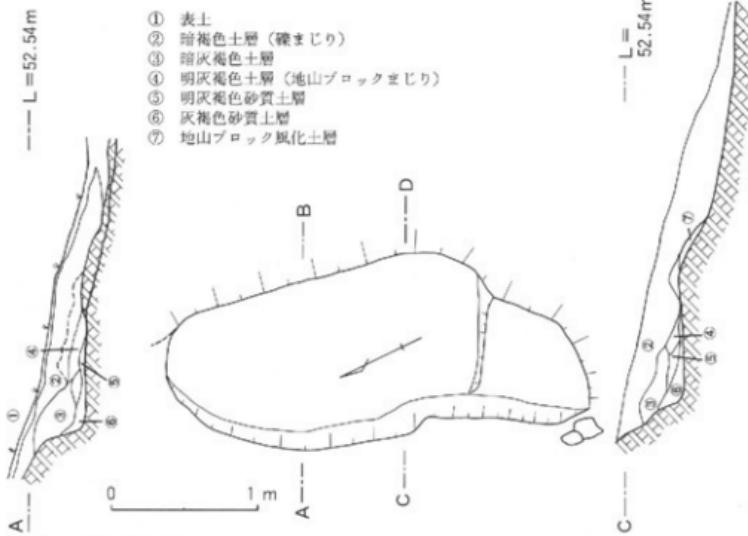


図24 SX 01 実測図

土壤 (SK 01) 墳丘と考えられた部分の I・II 区南側中腹に存在する。上端の最大東西長 220cm、最大南北幅 178cm、深さ(上端の最高部から)約 110cm を測る。発掘の途中で、除去してしまったが、遺構の上面にかなりの山石が置かれていたようである。図中の石はその一部である。底面が複雑な形となっている。並行する 2 本の土層観察用アゼの断面を比較してみたところ、東寄りの部分は土壤が穿たれた後に再度掘られたものと思われる。また、西側アゼの両面をみると、SD03, SD04 を埋めた砂質土層の上に礫・玉砂利混じり暗褐色土層が、さらにその上に大量の赤緑色地山ブロックが堆積している。表土近くの礫や玉砂利を掘り上げ、その上に SK01 の地山部分の土を盛った痕跡と推定できる。SK01 が穿たれた時期は、SD04 が自然に埋った後のことと判明した。遺物は出土しなかった。土壤の性格は不明である。

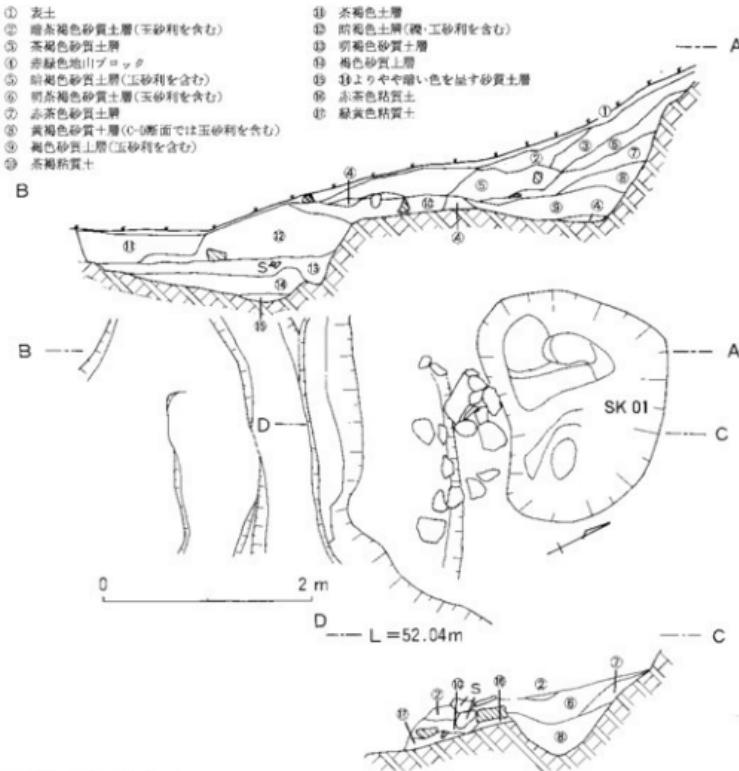




図26 SK 01



図27 SK 01 堀形



図28 SK 01



図29 SK 01



図30 SK 01 完堀後

集石遺構（SX 02） I区南側裾に存在する。後述するSD03内に存在する。人頭大ぐらいのものから、長径50cmに及ぶ石で構成されている。当初、何かを埋納するために石を並べたものと考えていたが、発掘が進むにつれてそうでないことが判明した。投げ捨てられたかのような形で検出された。放棄されたものか、何らかの意図があって置かれたかは不明である。周囲の土層をみると自然災害の山崩れによるものとは考えにくい。周辺の地山面に近い褐色砂質土層から磁器片や古銭が出土している。



図31 SX 02



図32 SX 02

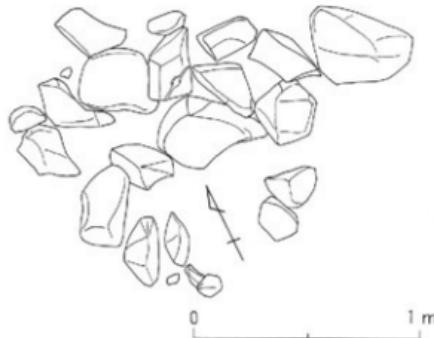


図33 SX 02実測図

溝1（SD 01） I・N区東側の山裾に存在し山からの水を西に向かって流す。横断面はU字を呈する。SD02より古いものである。

溝2（SD 02） I・N区東側裾に存在する。山からの水を西に向かって流す。横断面は逆台形を呈す。もとはSD01を使っていたが何らかの理由で途中から付け替えた形となっている。また、現状では上流部はN区でSD05とつながってみえるが、後にSD05により切られたためである。水流からみるとSD03との関係が濃厚である。



図34 SD 01・SD 02



図35 SD 01とSD 02・SD 05の切り合

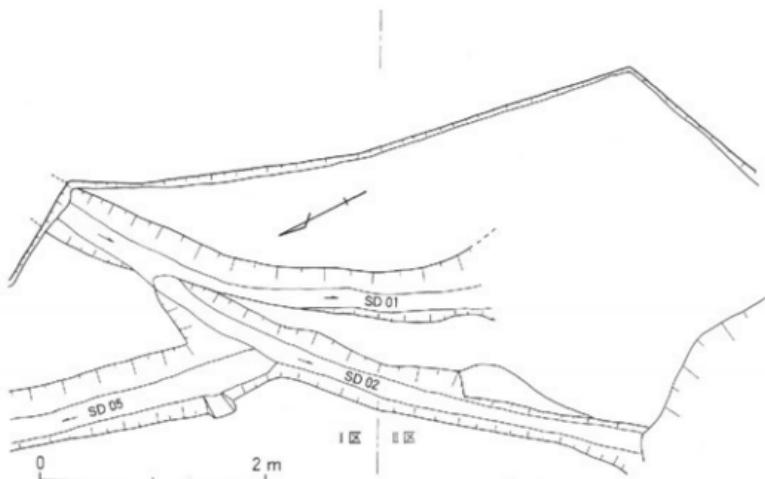


図36 SD 01・SD 02の実測図

溝3（SD03） I・N区南側に存在し、ゆるやかにカーブしながら山からの水を西に向かって流す。部分的に形状の曖昧なところもあるが、広く浅いU字溝で、II区側に入ると横断面は逆台形を呈す。この溝は、I区南東側の水とSD02の南端部分から落ちる水とを受ける形となっている。山からの水を西に向かって流すという機能がある。上層の堆積状況およびSD02とSD05との関係を考慮すると、SD05よりは古いものと考えられる。II区側では二股になっているが、これはSD04をSD03が切っているためである。

溝4（SD04） I・II区南側裾に存在し、水を北西に向かって流すが、I区ではかすかに底部の痕跡を残す程度である。横断面はU字を呈す。SD03よりやや高い位置にあり、前述のようにSD03で切られている。SS01の側溝であったと考えられる。他の溝や道路との切り合いの状況等から、溝の中では最も古いと考えられる。

道路1（SS01） I区南側およびII区南西側の部分に存在する。部分的にしか検出されていないが、北西へ下がる道と考えられる遺構である。全体に覆土が厚く地表面から約50cm下の面に存在する。幅約1.4mで、II区側ではSD04が北側に沿っている。I区の東側ではSD03と重なって形状が曖昧となり、II区ではSD03によって切られている。SD03はこの遺構よりも後に掘られたものである。遺構面のレベルをみると、後述のSS02とはかなりの落差がある、直接にはつながらない。SS02ができる前段階の道であろう。この調査区での伝えられる旧道は調査前の地表面とほとんど同じレベルにあったと思われる。II区側の路面上から十鍤が出土した。

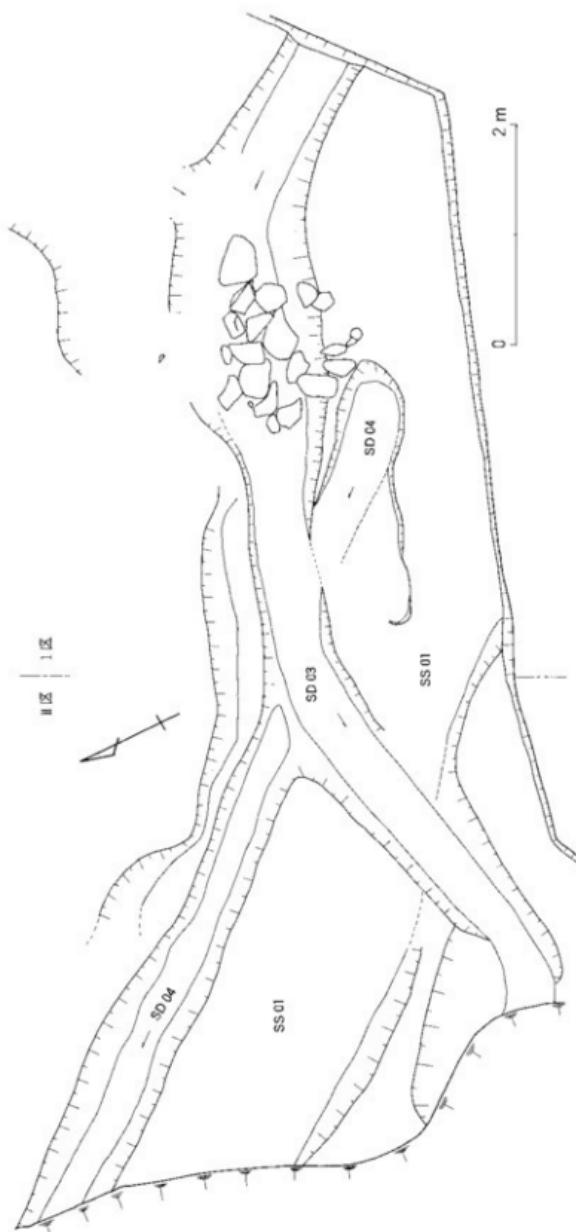


図37 SD 03・SD 04・SS 01 実測図



図38 SD 03・SD 04・SX 02



図39 SD 03・SD 04の土層堆積状況



図40 たまつた雨水（I区のSD 03）



図41 SD 03・SD 04の切り合

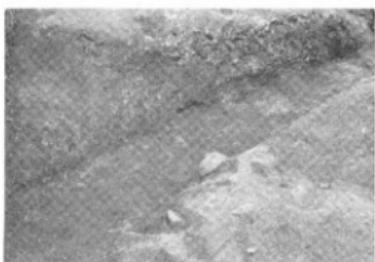


図42 SD 03・SS 01（手前）



図43 SD 03・SD 04・SS 01（西から）



図44 SD 03・SD 04・SS 01

溝5（SD 05） N区東側山裾に存在する。後述のSS02に付随するものである。道路の東山際に設けられた浅いU字側溝で、山からの水を北に向かって排水する。上流端部はI区へ流れるSD02を切っている。溝の中では最も新しいものである。

道路2（SS 02） I・N区東側裾に存在する。部分的には覆土の厚さが20cmを越す部分もあるが、大部分は表土直下に地山を削り出した道路跡が検出された。幅約1.5mの北へ下がる坂道となっており、SD05を伴う。地区住民の話を総合すると、現在の町道ができるまでこの部分を道路として使用していたとのことである。I区南側の部分ではこの道路につながる明確な道路を検出しなかった。他の溝や道路遺構との切り合い関係から、SS01よりも新しいといえよう。

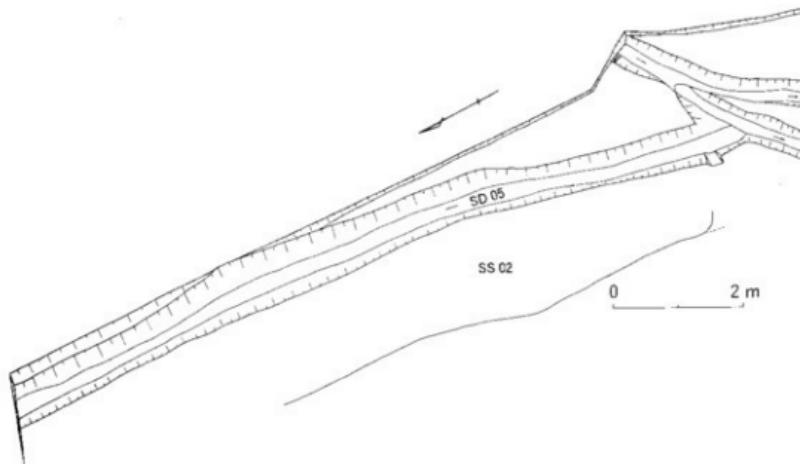


図45 SD 05・SS 02実測図



図46 SD 05・SS 02



図47 発掘後の全景（西から）

出土遺物

染付 小徳利片(図48-1)と湯飲み茶碗(図48-2)の2点がある。小徳利片はⅡ区の砾・玉砂利混じり暗褐色土層から出土した。残存高は7cm、胴径5.4cm底部径3.8cmを測る。内面はロクロによる整形痕がみられる。細長いタイプのもので、底部はアゲ底となっている。文様は判然としないが、草文とでもいうか大きい葉の植物が描かれている。色は比較的鮮やかな藍色を呈している。湯飲み茶碗はⅠ区のSD03、SD04を埋めている褐色砂質土層から出土した。それぞれ別の地点から4破片が出土した。器高4cm、口径8.6cm、糸底部径3cmを測る。伏せて底部の方からみると、外面口縁と外面底部に同心円状の線が描かれている。口縁部は1条、底部は2条のものが腰部と糸底のつけ根部分に巡らされている。内面は口唇部に茶色のいわゆる口紅が施され、その下に1条の線が巡らされている。口紅を除いて、施された色は比較的鮮やかな藍色を呈している。これらの染付は文様の手法と色調から19世紀後半のものと考えられる。

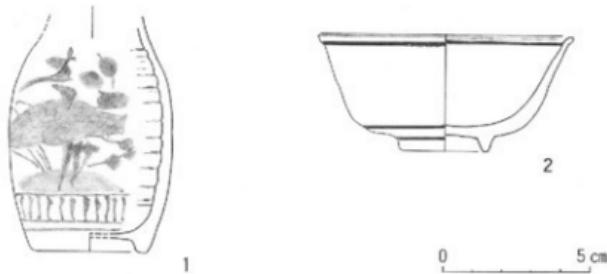


図48 染付実測図



図49 小徳利出土状況



図50 湯飲み茶碗出土状況



図51 染付

古銭 全て寛永通寶(図52-1~4)で、1・2はI区東側の礫層中から出土し、3・4は2枚重なった状態でSX02付近の褐色砂質土層から出土した。いたみが激しく不鮮明なものもあるが、鋳造手法等から大雑把に1と4、2と3のタイプに分けられる。1と4は径が25mmと大きく、文字が太い。2と3は径が23mmとやや小さく、文字も細かく鐵細な感じがする。どれも裏は無文である。寛永通寶は、寛永13年(1636)から鋳造されているが、明暦期(1655~1657)に至るまでのものは文字が太く大きく、寛文(1661~)期以降のものは鋳出される際の変化も少なく、画一性があり、文字も細かく小さくなっているという。⁸²従って、本遺跡出土の寛永通寶は前者が初期の「古寛永」、後者が「新寛永」ということになる。鋳造地は不明である。

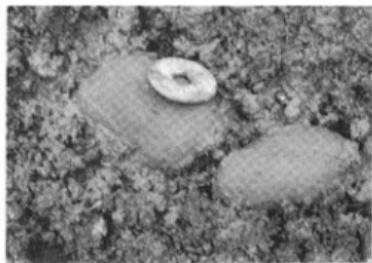


図53 古銭出土状況

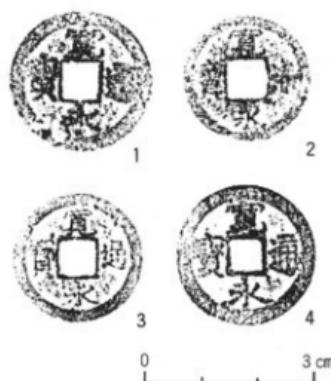


図52 古銭標本

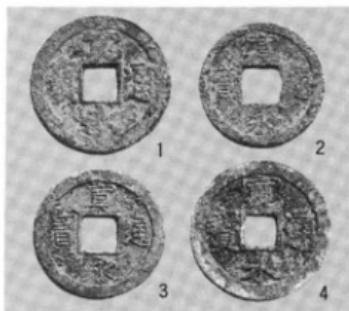


図54 古銭

土 錘 3点(図55-1～3)出土している。1・2はI区の褐色砂質土層、3はII区のSS01上面の礫・玉砂利混じり暗褐色土層から出土している。長さ4～5cm、最大外径2.5～2.9cm、内径～1.6cmのものである。表面は黒色を呈し、質は極めてかたく焼成良好である。

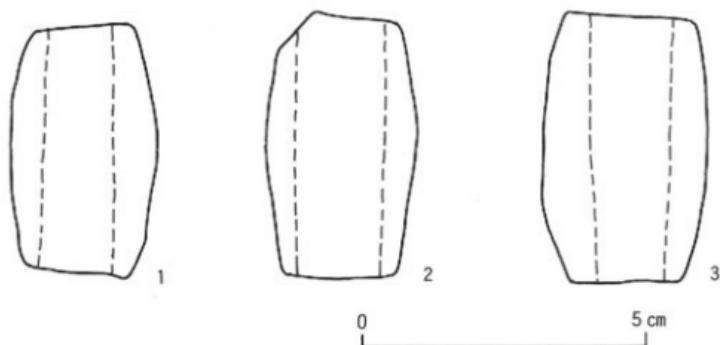


図55 土錘実測図

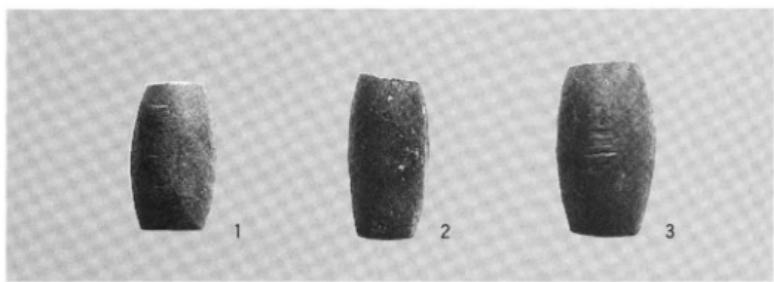


図56 土 錘

山守勝助について

生年は不明だが、没年は菩提寺である「見徳寺」（島根町野波所在）の過去帳によると「慶応2年4月16日」とあり、或名は「宝洲宗勝信士」となっている。現在の血縁は、本家である小川昇氏（東京都在住、最近死亡されたとのこと）と、勝助の孫ハルの嫁ぎ先の子孫にあたる小川隆一氏（多古在住）とがおられる。

勝助の年令について、妻のキタは明治31年に約90才で死去しているとのことであり、夫婦の年令が近いと仮定すれば、勝助も19世紀初頭、文化年間頃の生まれということになり、慶応2年（1866年）に60才あまりで死亡している計算になる。

勝助の業績について、『野波村地誌』（渋谷武一郎、明治34年）に次のように記してある。「多古の路傍、蟻屈セル古松ノシタ、石碑アリ、刻シテ勝助ト言ウ、聞ク、今ノ多古山半ル所肯山鬱蒼タルモノハ、皆、勝助生前ノ功績ナリト。」

この記述をもとに、地元の伝承等も加えて、『島根町誌』（昭和62年）には次のように伝えている。「多古の地区一帯の共有林の黒松が、心ない人々によって破壊され、山が荒廃していく様子に心を痛めた勝助は、自ら山番になり幾多の辛苦を乗り越えて現在のようなうっそうと生い茂る山に育て上げた。」この功績を讃え、安政5年4月（1858年）現在の場所に石碑を建立したとのことである。さらに、碑に使った石は海岸に転がっていたものを勝助自身がこの地まで担ぎ上げたという伝承も残っている。

これらのことから、勝助が没する8年前には碑が建ったことになり、石碑の施工主は不明であるものの、本人もその建立に深く関わっていたことが想像される。また、「台座の石は戦前にはなかったはずだ」と証言する地域住民もあることから、台座は戦後になつて、地区の人々により新たに備え付けられた可能性もある。

いずれにしてもこの一帯は、多古と沖泊との分かれ道にあたることと併せて、「おおまつさん大松様」とよばれた大きな松の木や玉砂利の存在などから、古くから地区の人々の信仰の対象となっていたことがうかがわれ、その地に石碑を建てた勝助は地区の人にとっては忘れてはならない人物であると言える。人々は現在にいたってもなお、盆や彼岸の時には花を手向けたりして、勝助の遺徳をしのんでいる。

ま と め

検出した各遺構の設けられた細かい時期は不明である。出土遺物や覆土の層序関係とか遺構間の切りあいによって、江戸時代のものと推定される。山守勝助の石碑は、その位置からⅠ区南側部分が埋って前述の三さ路ができた後に建てられたものと考えられるので、各遺構の初現は安政5年(1858)を下ることはない。各遺構等の推定される時期的前後関係は次の表(30ページ)のとおりである。

各遺構の様相は前述したとおりであるが、中でも溝はかなり注意を引いた。SD04、SD05は道路側溝であるが、他の溝は山(雨)水を引く水路と推定される。その流路はⅠ区の南東方向からゆるやかにカーブして、Ⅱ区西方向に流れるSD03にSD01(後にSD02)がⅠ区東側からの山(雨)水を流す形となっている。Ⅰ区東側の斜面にトレーンチを設定して発掘したところ、自然流路を検出した。本遺跡調査中の降雨時で特にまとまった雨の時、この自然流路に水が湧いて出た。その水はSD02とSD03を流れ下るのであった。地域住民の話によると、「今はもう見られないが、多古集落の限られた一ヶ所に水田が営まれていて、やはり水は上から引かれていた。この溝は、その方向に向かっている。」とのことであった。まさに灌漑用水路の可能性が高い。

当初、古墳と考えた部分のⅠ・Ⅱ・Ⅳ区では多量の玉砂利が検出された。葺石状になっていた部分もあるが、かく乱されて深い部分に入り込んだ玉砂利もあった。玉砂利はどの遺構に伴うかは不明であるが、SK01より古い時期から存在していたと考えられる。SK01を掘り上げたと推定できる土がⅡ区東側の土層で観察され、その中に玉砂利が混入している。墳丘状の高まりが既に信仰の対象であった可能性が強い。SX01も何かが祠られていたとも考えられる。住民の話では、このあたりに六地蔵が祠られていたというが、その位置は定かでない。鳥根町中央公民館長伊達章氏によると「子供のころの夏休みのある日、灘で玉砂利を12個(閏年は13個)拾って神社へ持つて行った。このことを、こおりとりと言った。」とのことである。神社でなくても、聖地では同様のことが行われていたかもしれない。野波地区の権現山遺跡(図2-8)も、古墳とも推定できる高まりを持ち玉砂利が散乱していると報告されている。²³⁾ 本遺跡と同じく海岸を見降ろす高台に位置している。



図57 権現山遺跡遠景

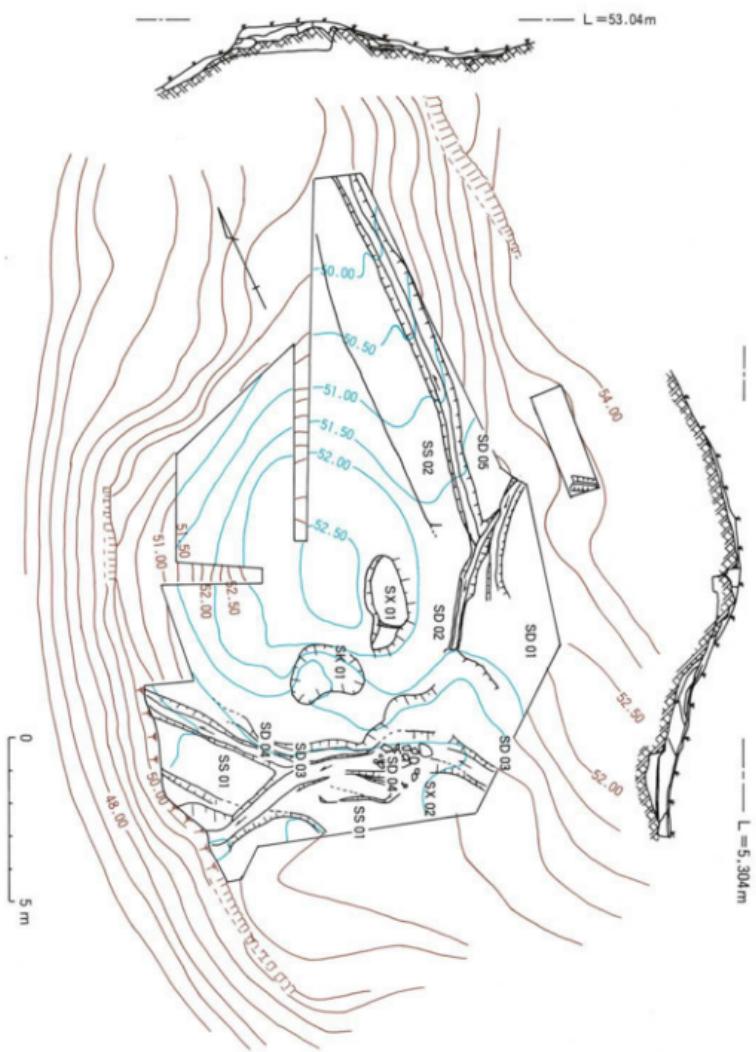


図58 大松様遺跡検出遺構実測図

検出遺構の初現及び推定継続期間

	古	新	近・現代
道 路	SS01 ? SS04 ? SS01 ? SS03 ?	SS02 SS01	SS05 ? SS01 ? SS02 ? 工砂利 ? 築石遺構
井			扇動砂質 ? 築水通溝 2 枚 染付け茶碗
土 塚			土錐
テ ラ ス			瓦水通溝 2 枚
その他の出土遺物			染付け漆利

↑ 初期及び終焉時期の不明な場合
→ 推定継続期間

参考文献等

- 注1 山本 清「出雲と島根町の古墳のあらまし」（島根町誌）1987
なお、本報告「島根町内の主な遺跡」に記述の各遺跡は、島根町誌に掲載されている。
- 注2 島根町教育委員会「亀田横穴群」1990.3
- 注3 山本 清「山陰の須恵器」（山陰古墳文化の研究）1951
- 注4 内田律雄「出雲の製塩遺跡」（ふいーるど・のーと 本庄考古学研究室）S.60.7
- 注5 日立金属株式会社安来工場和鋼記念館「島根町野波屋床たたらの鉄滓及び炉材の調査」S.59.6.
- 注6 島根町教育委員会「宮尾横穴群」1990.3
島根町教育委員会「宮尾横穴群第2集」1992.3
- 注7 鹿島町教育委員会教育次長 曽田 稔氏のご教示による。
- 注8 小川 浩「古銭の収集」（徳間書店）S.41.6.30
郡司勇夫編「日本貨幣図鑑」（東洋経済新聞社）S.56.10.15
小川 浩「日本貨幣変遷史」（日本古銭研究会）S.58.3.28
- 注9 山本 清「出雲と島根町の古墳のあらまし」（島根町誌）1987

大松様遺跡

平成6年1月

発行 烏根町教育委員会
島根県八束郡烏根町加賀1455

印刷 (株)高浜印刷所
島根県松江市北畠町8
